

トピックス 東京都支部大会参加者増える

6月末現在の参加申込み者が約2500名ということもあり、大会実行委員会は6月末の募集期限を7月末まで延長してさらなる参加を呼び掛けて参りました。私の担当教室でも再度みなさんに呼び掛けましたところ、あらたに8名の方に参加申込みをしていただきました。ありがとうございました。

最終確定出席者数； 瑞江鶴の会 16名、東大島鶴の会 14名、亀戸SC教室 3名、合計 33名

なお、その後の全体的な状況としては7月19日現在で3250名に達したと発表されておりますが、さらに月末に向けて増加するものと見込まれています。

「太極拳まるごと勉強会」申込み状況

前月号でお知らせした「太極拳まるごと勉強会」ですが、おかげさまで担当教室以外の方からの参加申し込みも多くあり、午前の部(第二水曜日)は7月25日現在27名に達しましたので、申込みを打ち切らせていただきました。ただし夜の部(第三水曜日)はまだ10名程度ですので、引き続いて申込みを受け付けております。ご興味のある方は是非ご連絡ください。

参加者の方には9月のはじめには詳しい資料をお届けする予定ですので、しばらくお待ちください。

閑人閑話 楼蘭の美女

さる7月16日に湯島聖堂で行われた「楼蘭の美女」と題する文化講演会を聴いてきました。講師は元NHK「シルクロード」取材(1979年)団長の中村清次先生で、現在でもシルクロード関連の講座を持ってたり、現地ツアーの講師を務めたりと大変現地の今昔の事情にお詳しい方です。

当時の日中共同調査がひとつのきっかけとなって中国におけるシルクロード研究は非常に活発になり、その後さまざまな発掘調査などによって貴重な文物が発見され、その歴史についても新しい研究が進められているということです。

砂漠の中に埋もれてしまった楼蘭王国やその近くの“さまよえる湖”の話は日本人のシルクロードロマンを掻き立ててやみません。私もその一人で、敦煌からウルムチ、トルファン、はてはカシュガルまで数回訪れています。

先生のお話の中心は「楼蘭の美女」のルーツについてです。そもそも「楼蘭の美女」というのは、1979年の取材に先駆けて中国側が発掘した楼蘭の西にある「古墓溝遺跡」で発見された女性ミイラにつけられた名前だったそうですが、その後さらに周辺部の調査が進み、「鉄板河遺跡」からのものが第2代の美女、そして21世紀に入って発掘された「小河墓遺跡」のものが第3代の「楼蘭の美女」[写真右]だそうです。この美女の特徴は極めて高い鼻梁と長い睫にあり、あきらかに西欧人種に類することは、同時に発掘された100体を超える男女や子供のミイラにも共通していることです。ミイラはそれ以前の発掘分も含めて推定年代は紀元前1800年

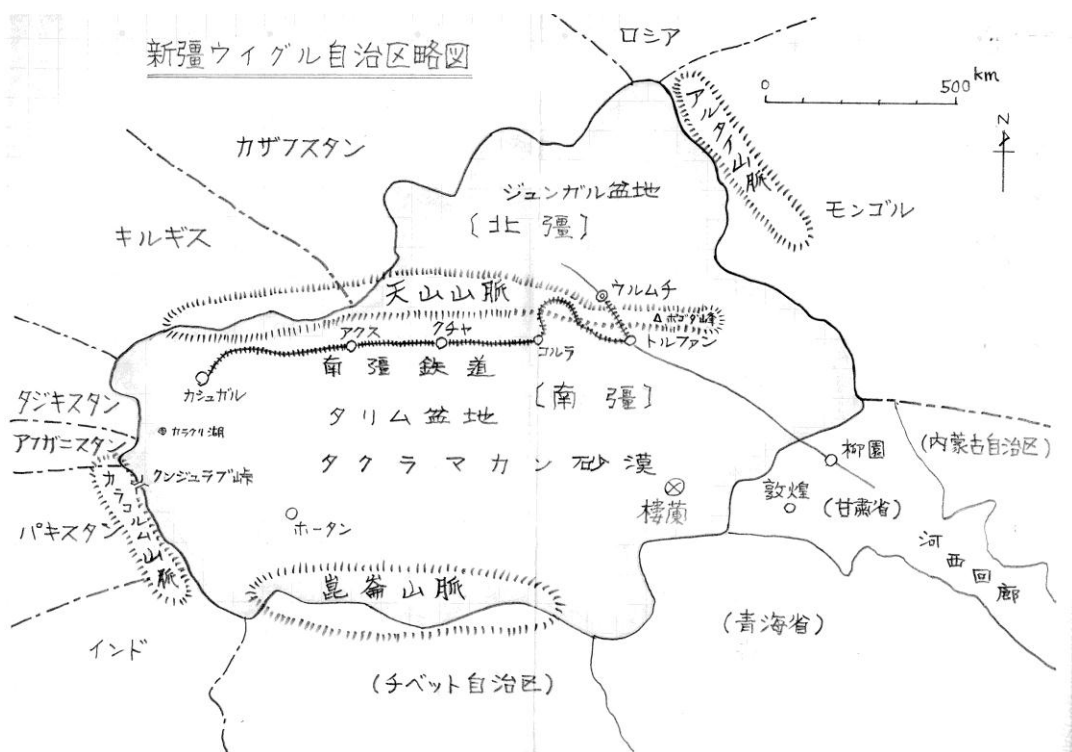


ごろだそうです。

ミイラを収めていた棺は胡楊の木でつくられていて、牛や羊の皮で覆われていること、ミイラの体はマントのような毛織物で包まれていて、フェルトの帽子をかぶっていること、副葬品からも絹はいっさい見つかっていないことなどです。このころはまだ“シルクロード”以前だった！ということだそうです。

発掘された文書などからこの地方で使われていた言語はインドヨーロッパ語に属する“トカラ語”だそうですから、まさに住んでいたのはインドヨーロッパ語族だということです。いわゆる原ヨーロッパ人種と呼ばれる種族が今から 5000 年ぐらい昔に黒海周辺からヨーロッパや中近東の一部、そしてイランやインドへと順次拡散していったのですが、その一部が東進してこのタクラマカン砂漠の東周部の、当時は水も緑も豊かであった、楼蘭の地に定住した、その一族がこのミイラたちだということでした。

2000 年に私が訪れたタクラマカン砂漠の西の端にあるオアシス都市カシュガルにも紀元前にはインドアリア系の人々が住んでいたと聞かされましたので、楼蘭に限らずこの新疆地方に広くインドアリア系の民族が居住していたものとも想像されます。いずれにしても何とも壮大な話ではあります。



楼蘭の場所は右の地図でご覧いただけるように、敦煌の西、トルファンの南東に位置し、当時

はまさにタクラマカン砂漠の交易路の中心であったオアシス都市でした。“さまよえる湖”ロブノールの水の恵みで栄えた都市だったのでしょう。私は楼蘭遺跡そのものへはついに行くことは出来ませんでした。2005 年の夏のシルクロードツアーのときに訪れたウルムチの新疆博物館でこの第 3 代の「楼蘭の美女」の素顔を、ガラス越しではありますが、まじかに見ることができました。長い睫と高い鼻、まさに西欧の美人！であることに衝撃を受けた記憶はまだ鮮明に残っています。

左顧右眄～さこ・うべん～ (62)

【第 12 話 松田隆智の探求した最強の中国拳法とは?】

戦後の日本における中国拳法の研究家といえばまず佐藤金兵衛、笠尾恭二、松田隆智の 3 人の名前を挙げる事ができます。それぞれ戦後の早い段階から中国武術、中国拳法を紹介してきた功績は大きいものがありますが、なかでも、松田隆智氏は自ら現地に渡りあらゆる流派の師に教えを乞い、身を持って習得しました探求し続けてきた稀有の人です。松田氏が何を求めどのように学んできたかの足跡を辿って中国拳

法の何たるかを勉強してみたいと思います。

第1章 松田隆智とは？

松田隆智氏は1938年（昭和13年）に愛知県岡崎市に生まれました。本名は松田鉦（まさし）。中学生から空手をはじめ、中学2年の時には大学生のグループに入って本格的に修行。高校の空手部の主将を務めました。2年生、3年生と夏休みには上京してあらゆる武術家に教えを受けています。剛柔流（後の極真）空手の大山倍達、太気拳の澤井健一、大東流合気柔術の吉田幸太、柔道の木村政彦、甲賀流忍術の藤田西湖、清陰流剣術の柳生巖長など錚々たる顔ぶれです。さらにははるばる鹿児島に示現流剣術の宗家東郷重清師範を訪ねて“二の太刀知らずの”示現流をも学んでいます。どこへでも彼独特の率直さと強い行動力とで飛び込んでゆくので、高校生でもあり、当時はおおらかに受け止めてくれたのであろうと推察されます。ともあれ、この若さで、“小よく大を制するものは何か”“最強の打撃とは何か”という課題をしっかりと持っていたことは驚きです。

高校3年のとき他校生との喧嘩がもとで、あわや退学処分になるところを、寺に住み込むことを条件に免れます。これ以降仏教の修行の道にも入ります。1958年（昭和33年）高校卒業後地元のトヨタ自動車に就職しますが、ほどなく退職します。この後大東流柔術、八光流柔術などを修行し、1968年（昭和43年）に上京し武術家としての道を踏み出します。

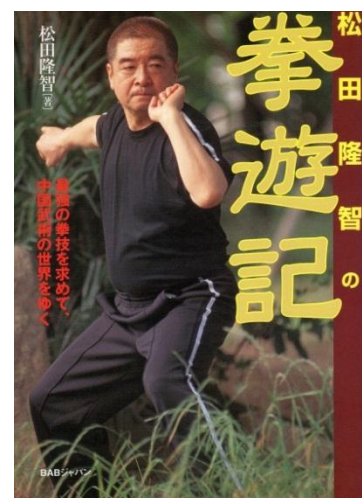
第2章 中国武術との出会い、そして台湾での修行

中国武術については、澤井健一師や佐藤金兵衛師から手ほどきを受けていたようですが、大きなきっかけは1969年（昭和44年）に日本武道館の全日本空手大会に台湾から招かれた洪懿祥師^{いしやう}の形意拳の模範演技を見て感激したことにあります。直ぐホテルを訪ねて教えを乞い、同氏の滞在中1週間習っただけではなく、翌1970年（昭和45年）には、台湾に渡って本格的に形意拳を習います。

このときを始めとして、1973年（昭和48年）までに4回台湾に通って、蘇昱彰師^{いしやう}（八極拳）、劉雲樵師^{うんしやう}（1909～1992）（八極拳、燕青拳、八卦掌）、徐紀師（陳式太極拳）などの名人について修行します。当時の台湾には国民党とともに本土から台湾に逃れてきた多くの武術家が健在でしたが、なかでも劉雲樵師は蒋介石総統の護衛官の武術師範であったもっとも高名な人です。同氏は台湾武術界の組織「武壇」を結成しそのリーダーでもありました。

劉雲樵師は1909年河北省滄州地区の孟村県の生まれで、幼少の頃から太祖拳や燕青拳などを習いましたが、槍術と八極拳の名手として名高い李書文師（1864～1934）について八極拳を習うようになってめきめきと腕を上げます。25歳のとき師の李書文が横死しますが、その後はさらに六合螳螂拳や八卦掌も習得、やがて軍に入り、特殊部隊で活躍。蒋介石に従って台湾に渡ってきたという経歴の持ち主です。（雲の手通信2012年4月第92号、5月第93号所載の「百花繚乱の中国拳法」参照）

また台南生まれで螳螂拳の名手として知られていた蘇昱彰師はその型破りな性格もあって、こだわり無く松田師を受け入れて、（本土から逃れてきた国民党系の外来人には反日感情もまだ強かった時代ですが）自らの師でもある劉雲樵師に引き合わせるなど終始面倒を見てくれた恩人ともいえる人です。後に招かれてベネズエラで中国武術を教え、現在はニューヨークを拠点として世界中で「八極螳螂武藝」の普及活動をしています。



松田氏はこの間仏教の修行にも励み、1971年（昭和46年）には真言宗の僧籍を得て以降僧名「隆智」を名乗るようになります。1976年（昭和51年）と翌年の2回、インド、ネパール、パキスタンなどを仏教の勉強のために訪れています。またこの頃から中国武術の書籍を出版していますが、なかでも1976年（昭和51年）に出版した「図説 中国武術史」はのちに中国でも翻訳出版された名著で、中国人以上に中国武術に詳しい人物として知られるようになるきっかけともなりました。

こうしたことから、日中の武術交流の橋渡しをしたり、メディアで中国武術の紹介をしたり、あるいは劇画の原作を書いたり（1988年から1992年まで週間少年サンデーに連載の『拳児』）と多角的な仕事をしています。さらに画期的なことは、1987年に中部大学工学部の吉福康郎博士が行った、中国拳法特有の“寸勁”の実験に実技者として登場して、その猛威を科学的に立証したことです。これはテレビや新聞にも大きく取り上げられました。2005年と2006年には名著『拳遊記』（前頁写真）『続拳遊記』を出版しています。（次号へ続く）

旅をうたい拳を詠む シルクロードを詠う

私のシルクロード旅行は1989年に始まり、2000年、2005年と3度に及びました。敦煌、ウルムチ、トルファン、クチャ、カシュガルなどを訪ねて作った歌の一部をご紹介します。

炎日に玉門関は白く燃え緑の疏勒河遠くかげろふ (敦煌)

ゴビ灘の高みに朽ちゆく陽関に羌笛のごと風は鳴るなり (敦煌)

羌笛；異民族の持つ、あるいは吹く笛のこと。羌は羊と人、つまり(中国の西方の)遊牧民族の意味。

鼻高くまつげの長き楼蘭の美女語らばや汝がふるさとを (ウルムチ)

玄奘が説法せしとふ僧堂もたださらさらと砂に崩れる (トルファン)

タクラマカン砂漠の中の夜の駅ただ弦月と天山の風 (アクス)

君知るやスバシ故城の野西瓜を 花のごとくに果肉開くを (クチャ)

崖際にタマリスク咲く千仏洞楽天窟ははるか高みに (クチャ)

パミールの道出水に阻まれて虚しく仰ぐ雪の奥山 (以下カシュガル)

泥の水されど命の水ならん

経絡のごと村巡る水

着飾った家族を乗せたロバ馬車が

次々とくる村の市の日

生ぬるき新疆啤酒にもやや慣れて

終わりに近き旅のアンニユイ

北京時間に取り込まれたる新疆の

午後の十時の夕映えの雲

【写真右】トルファン・交河故城

